新村出全集

第五卷

新村出全集

第五巻

筑摩書房

新村出全集第五巻

昭和四十六年二月二十日　第一刷発行
昭和五十二年五月三十日　第二刷発行

著　者　新　村　出

担当編者　木　水　彌　三　郎

発行者　東京都千代田区神田小川町二ノ八
井　上　達　三

発行所　東京都千代田区神田小川町二ノ八
筑　摩　書　房
郵便番号　一〇一―九一
電話　東京(〇三)七六五一(代表)
振替　東京六―四一二三番

印刷　多田印刷株式会社
製本　矢嶋製本株式会社

落丁・乱丁本はお取替いたします

南蠻紅毛篇 I　目次

南蠻記……5

初版序 7　再版本に序す 9

南風—極東流竄の詩人カモエンスを憶ふ— 12　嶺南思出草 32　鎖国 38　沈鐘の伝説 56　橿の葉 58　古渡りのゴブラン織 66　南嶋を思ひて —伊波文学士の『古琉球』に及ぶ— 67　日本一と日本晴 76　八幡船時代の俗謡 81　足利時代に於ける日本と南国との関係 84　印度副王より豊臣秀吉に送つた書状 99　活字印刷術の伝来 111　天草吉利支丹版の平家物語抜書及び其編者 126　南蠻本平家物語抄 147　吉利支丹版四種 160　乾坤弁説の原述者沢野忠庵 179　メキシコ旧版の日本文典 188　古銅版画と辻蘭室 193　テオフィロ・ブラガと葡萄牙文学 200

南蠻更紗……205

序文 207　再版本に序す 210

雪のサンタマリヤ 213　吉利支丹文学断片 221　遵主聖範の旧訳本 236　吉利支丹宗の遺物 241　日本最古の銅版画 246　南蠻趣味と和歌其他 —三

百年前の回顧—250　南蠻に関する俚謡その他254　真宗と切支丹262　煙草と煙管267　時計伝来の歴史273　賀留多の伝来と流行285　近世輸入服飾品と其名称295　ちやるめら302　日本美術史上の新研究307　日本文学の海洋趣味310　海賊の話319　大西洋上より324　長崎再遊333　日本人の眼に映じたる星339　星に関する二三の伝説360　二十八宿の和名364　星月夜368　昴星讃仰372　星夜讃美の女性歌人379　花の名三つ四つ386　ふれふれ粉雪402　徒然草の感興407　北原白秋の『思ひ出』410　図書館の一隅より413　地獄小話422　鷹狩426　鋤焼物語454　語原雑話461　エスペラントの好望474　バクーニン来航の事など478　去来一家の事484

薩道先生景仰録—吉利支丹研究史回顧—……487

単行本未載篇……521

『南蠻美術集』序523　吉利支丹版因縁物語525　踏絵の話528　南ばんの名残535　『高山右近大夫長房伝』序537　聖ザベリオ記念の京都天主堂539　聖ザベリヨ景仰記541　クリスマスの今昔545

解説……木水彌三郎547

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

新村出全集　第五巻　南蠻紅毛篇Ⅰ

南蠻記

初版序

欧洲文物の東漸は初め葡西両国より入りしものと、後に和蘭より到りしものとの二潮流ありて、その中間に禁教と鎖国との二大打撃ありしがために、南蠻の黒船が載せ来しそれは、大方亡びて而も遺しし痕跡きはめて薄く、そぞろに騒人の情緒を動かし史家探古の念を促がすこと少からず、紅毛の帆船が寄せ来しそれは、いみじき抑圧を忍びつつも遅遅として弘通したれば、その漸進の経過をたどるに文化史上の興味溢るるばかりなり。今本書の収むる所は、すなはちこれらの詩趣史興より発して、主として西学東渡の沿革を叙述し或はその資料を供給せる十数篇を骨子とし、配するに足利時代の南国交通および倭寇の史蹟と近代琉球の文献とに関する蕪文数篇を以てす。従ひて全篇断片ながら西力東進史に日本洋学史に聊か貢献する所あるべく、併せて国民が南方発展の史実を含めりといふも誇称にはあらじ。若し夫れ八幡船の西征し朱印船の南下せしあたり叙事詩の料ありとせば、神国に邪宗を弘めし罪科重く永劫打払はれし南蠻船のあとには戯曲の片影を認むべく、出島と爪哇との間を来往したる紅毛船の白帆には悲しき抒情詩を誦し得べきにあらざるか。著者元より詩想に乏しく篇中これら好箇の詩料をして躍如たらしむる能はずといへども、以て騒客諷吟の取材に備ふるに足るべきふしあるを疑はざるなり。

大正四年七月二十八日

新村出

〈以下、漢数字（一）（二）……を以て表はした注記は、著者が本書の関連個所の余白に自ら書込まれたものを、採録したものである。〉

（一）○「南蠻記」ト題スル著述漢土ニモアリシコト、李時珍ノ本草綱目（万暦十八年序、二十四年進表）序例ニ載セタル引拠古今経史百史百家書目（正徳四年和刻本ニテ廿五丁オ）ニ見ユ、著者ノ名、年代、巻数等ヲ記サズ（大正十一年九月識ス）

○宋史藝文志、南蠻記五巻アリ。

○証類本草（図経及衍義ヲ合）ノ引用書ニモ「南蠻記」ノ名アリ。

○段成式ノ酉陽雑俎前集巻之十一、広知（汲古閣本ノ和刻本七、ウ）

或言竜血入地為琥珀、『南蠻記』寧州沙中有折腰蜂、岸崩即蜂出土人焼治以為琥珀、

○南蠻志一冊（彰考館図書目録一五七頁丑部諸史）

○南蠻記ヲ求メラレテ無キ旨ノ回答、南蠻天法記（宝暦十四年）裁配帳八冊ノ中ノ一冊ニ見ユ（大阪書籍組合蔵）昭和七年九月

（二）○島原城中躍舞歌（嶋原天草日記、松平輝綱、寛永十五年二月十日ノ条）

一、カ、レ〳〵寄衆モツテカ、レ、寄衆鉄炮ノ玉ノ有ン限ハ

一、トント、鳴ハ寄衆ノ大筒ナラスト、ミシラシヨ、コチノ小筒デ

一、有ガタノ利生ヤ、伴天連様ノ御影デ寄衆ノ頭ヲズント切支丹

○親は他国に子は島原に桜花かやちり〳〵に。

（三）○さゝら節（盆踊歌）（俚謡集）

われは十七わかい身なれど……なんば船とはあれえかの、堺出てから……いざやもどろやともだち（志摩）

〈全文を記るしあれど、『南蠻更紗』中の「南蠻に関する俚謡その他」に載せられたれば略す。〉

○長唄「唐人」（日本歌謡類聚、上、七八六頁）

入船に待ち明かしたる長崎へ、どつと碇をおしかりも、かへり三桝や市川の……（中略）沖の島山ちくらかいそよ、鮫や鯨がおもしろい、サ、、、沖の島山あんなんこくよ、珊瑚瑪瑙が流れ寄る、サ、、寝言まぜりの口拍子、早入船のよそほひに、てつこふつかひが先払（下略）

○堺の浜踊（仝、上、八三二頁）

堺の浜に、ありやこりや、流れ枯木が捨てゝある……定めて〳〵きんきめ細にござるほどに、唐木でござるべいよのさんがれ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

再版本に序す

『南蠻記』の初刊は、大正四年の八月のことであつた。それは不惑に達したとはいひながら夢まだ多きわたくしが四十歳の真夏の編輯であつた。書中に収めてある諸篇は、殆ど皆わが三十年代の筆であり、日本一と日本晴を讃美した一篇のごときは、それよりも若い頃に成つたものかと記憶する。今その内容を一閲し、又その旧序文を一読してみると、三十年前の自分がそぞろになつかしくもなり、追うてかへらぬ青春がこひしくなるばかりであるが、それと同時に、よくもこんなに書けたものだと微笑ましくなる所がある。いざいざと再版本の序文を書かうとしても、とてもあゝいふ構文は出来さうにもない。折角大雅堂の人々の格段の好意で、野ざらしの馬骨が拾はれて花やかさうに上梓されるやうになつたにつけて、この伏波将軍、雀躍の情に堪へかねつゝも、南風の詩など謡へさうにもない。そこで想ひ起したのは、近ごろ愛誦した川田順翁の四行詩十二節の御朱印船の一篇であるが、翁は先づ

安南、柬埔寨、暹羅、呂宋、
満剌加、爪哇まで航きかひし
御朱印船の画を見れば
みなみの洋の匂ひ立つ。

とある首節から、船上の描写精細を極めたのち、

町人どもと武士も居て
甲板狭く乗りあふれ、
水夫、舵手、物見には
南蠻人の顔多し。

船乗人の健やかに
日焼けのしたる頬のごと
みどりの高帆ふくらむは
貿易風を孕むらし。

かくも朗らに活きいきと
何方を指して航くならん。
日本人の遠船出、
そぞろに現今を想はしむ。

と讃し収めた。わたくしは徒らに序文の構想に悩むことなく、単にこの作者の絶唱を高らかに吟じつゝ、わが愁老の情を遣ることにしようと思ふ。唯、この三十年の間において、わたくしにとつて殆ど処女作とも名づくべき此の

小著をちらほら愛読して下すつた読者に対しても、向後此の再刊本によつて新に興味をひかれるかも知れない所の読者に対しても、わたくしは気が澄まず又気おくれがするばかりであるが、これはすべて時勢の並々ならぬ大変動と、わが老懶無為に対する悔悟の念とに因るに違ひない。

挿絵も取りかへて見たが、平凡に逸して、意に満たぬものが少くない。校正も耄眼の堪へがたさに、老妻と次男とに委ねざるを得なかつたが、それぞれ疲憊や繁劇の裡によく手伝つてくれたのを感じた。

昭和十八年四月二十六日

悲母の祥月命日の夕ぐれ小山居に於てしるす

新村出

南風

――極東流竄の詩人カモエンスを憶ふ――

一　黄金が島

東方に金の島、銀の島があるとは古代から遠西人が懐いてゐた妄想である。プリニウスやプトレマイオスに至つては、黄金が島は、或は印度河以東にあるといひ、或は後印度にあるといひ、或はマラッカ半島附近にあるといつた。此御伽話にでもありさうな島は、中世を経て近世の初、所謂発見時代に入つて愈々探検家の慾念を高め、航海者の好奇心を助けた。所へ、マルコ・ポーロの紀行で、日本には宮殿が黄金を以て屋根を葺き、鋪道を畳み、床も窓も金づくめであるといふ話が伝つて居た。此様な話は、異域より帰来した旅行家の常に好んで吹聴する法螺であつて其儘真面目に取上ぐべき筋ではないけれども、又何等の根拠のない作り話として全く排斥すべきものではなからう。宋代に於ける彼我商人の来往、求法僧入宋の頻繁から推して、如是金殿の風聞が既に閩浙の要津に達して居つて、彼のゼニス商人の息子が杭州なり刺桐（泉州）なりに於て之を耳にし、帰国後更に之を大袈裟に伝へたものとは見られまいか。其風聞の金殿なるものが「上下四壁内殿皆金色也」とある金色堂などを指すや否や、又金色堂が屋蓋にも貼金を施してあつたといふ古伝と推測とが当つてをるや否やは直に定められる問題ではないが、兎も角あの風聞に元と何等か事実の分子が存したとすれば、先づ何人にも考及ぶべき建物は光堂であらう。室町の頃の金

閣銀閣はいふに及ばず、安土時代の公方邸の天井や柱や階段は金を以て包んであつたとは例の南蠻僧の報告にも見え、其邸址から貼金瓦が出たのは近年の事である。桃山御殿の廃墟から往年来屢々貼金屋瓦が発掘されたことは誰も知つてゐる。文献徵すべからずとせば、鋤や鍬を力に気永に機を待てば、鎌倉や藤原の盛時の建築にも金瓦を用ゐた例を発見するのであらうし、従て金殿の風聞も愈々無稽ではなくなり、史興益々加はり来るであらう。茲に比較に引くのは、大き過ぎるが、太古希臘の南島クレータが海国として水上権を専にしてゐた時分、島の都クノッスの内裏に名高い迷宮（ラビリントス）があつて、其奥で希臘の勇士テゾイスが猛牛を退治したといふ武勇譚は、唯の昔話とのみ人口に膾炙して居たが、近年イーヴンス氏の発掘に由て丁度其迷宮に相当すべき構への宮殿が現はれ、又猛牛退治を想像せしめる様な画図類も出て来て、彼の武勇譚は全く無稽な作り話ではなくて、幾分か事実に基いた物語であらうと推察するに至つた。又トロヤ城址の発掘者として有名な故シュリーマンは別にエーギナ湾に瀕するチリンスの宮城を掘起して、古典学者をして、其宏大な城壁や宮中の結構に、宛もオヂッソイス物語に見えたアルキヌース王の宮居の面影を懐しめた。デモドコスが弾く琵琶にトロヤ軍記の一曲を聴いて、当年の旗頭であつたオヂッソイスが今は敵を亡ぼし旧里に帰る途すがら、波に漂ひ舟に浮きといふ有様の傷はしさに、潸々（さめざめ）と泣いたといふ百磯城の大宮処は此間ぞと回想する者もある。掘出された古炉は白き腕（たゝむき）の王妃が近う、玉座を占め給へりとある其炉だらうと懐古する空想家もある。斯の如く近来の考古家が鋤の端の掘出物は詩人の想像から作上げた架空談に止まると信ぜられた物語、俚俗の口碑に伝つた根無草から花が咲いたと考へられた昔話をば、段々事実化しようとする。日本にある金殿の話も、考古家の発見に由つて相当の根拠を有つやうにならぬとも限らぬ。コロンブスの探検心を刺戟したトスカネルリの書簡中にも、右の金殿の話が引いてある。されば彼のジェノワ出の探検家が黄金花咲くと思つて日本国を目指して渡海したとは謂れぬまでも、冥々の裡に之を引寄せたのは、或は五月雨に降残したる光堂の金色の余光かも知れぬ。更に別の推定を試みれば、あのヴェニスの行商の息子は遠西に伝はつた金島の昔話を日東に結

付けて金殿の話を組立てたとも考へられる。

久しく金島（こがねしま）の所在地附近だと仮定された馬来半島の一角が、十六世紀の初、一たび仏郎機人（ふらんきじん）の占有に帰したかと思ふと、スマタラ島の南に金島があるといふので幾度か船を出しては、覆没の難に罹つたこともある。或船の報告に由ると、実際其島を発見して黄金を満載して帰航する宝船を見たといふ。南蠻の七福人でも乗つて居さうなことである。所が初夢の類であつたと見えて、金の島は見当らない。段々南へ南へと探してゆく。今度は少し西だ、そら東だといふ中に百年ばかり経つ。遂に黄金が島は日本の東へ移つて来た。斯くて南海東海の智識は増したが、たうとう島は見付からず仕舞ひ、笑話にもなりさうで、又教訓にも引かれさうな話である。然しながら、当代慶長頃の日本の金銀の産出額は夥しいもので、海外への流出も亦驚くべき程であつた。南蠻貿易極盛の一頃、天川（あまかは）船は年々我国より一千万円にも上る黄金を積んでいつたといふ。さればケンペルは形容して、輸出がもう二十五年も続いたら、天川はソロモンの栄華の極み時分にジェルサレムの府庫に充ちた金銀の富と同等に達したであらうと評した位である。西班牙人が日本を銀の島と呼んだことは、フランシスコ・シャヂエル上人の書簡にも見えるが、我国を黄金が島と名けたことは聞かぬ。然し、遠西人の昔話の金島は即ち日本だと誇称しても恥か

南洋タヒーチの野趣（ゴーガン筆）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com